様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　6 月 22 日現在

研究種目：若手研究 B
研究期間：2007～2009
課題番号：19730348
研究課題名（和文）　近代民間公益活動の経営形態・理念及び組織間関係の動態的研究－報徳社の発展を中心に
研究課題名（英文）　The evolution of managing systems and networks in modern CSOs: A case study of Hotoku Associations

研究代表者
川野　祐二（KAWANO　YUJI）
下関市立大学・経済学部・准教授
研究者番号：30411747

研究成果の概要（和文）：近代日本において急激にその数を増やした報徳結社は、非営利組織ネットワークのモデルケースといえる。報徳結社群の発展経緯を動態的に分析しつつ、報徳社の拡大戦略を論考した。報徳運動草創期のリーダーたちは、報徳結社群拡大の戦略プランを用意していたわけではない。しかし、意図せざる拡大戦略と言うべきものを、その足跡に見ることができる。報徳結社群は、環境に適応しようとする学習プロセスの中で、徐々に拡大戦略を獲得していったのである。

研究成果の概要（英文）：*Hotoku Associations* which have grown in number in modern Japan are a fine example of nonprofit networks. The purpose of this study is to examine the expansion strategies and diffusion processes in *Hotoku Associations*. The leaders of the *Hotoku* movement did not have a clear expansion strategy; their expansion strategy was unintentional. The hidden strategy of the *Hotoku* population case can be seen in their education processes which were adapted to the social environment.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 19 年度 | 700,000 | 0 | 700,000 |
| 20 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 21 年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,900,000 | 360,000 | 2,260,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：社会集団・組織論・NPO・市民結社・創発戦略・ネットワーク

## １．研究開始当初の背景

(1)過去 10 年ほどの間に、公益法人及び NPO（非営利組織）研究が盛んになり、多数の学会、研究会、ネットワーク、プロジェクトが立ち上がっている。しかし、これらの研究の多くは、日本における篤志家や慈善事業の公益推進様式と、民間公益活動の歴史的構造転換まで見据えた全体像を描き出そうとする視点に乏しく、それらが現代の公益法人や NPO に与えた影響の歴史的経緯はなお観察されない。研究の関心もまちづくり、教育、途上国開発、介護福祉などの個別もしくは現実

対応の領域に偏りがちである。我が国で行われてきた数々の近代の民間公益事業は、現在のNPO活動と全く別の次元で語られて、歴史的連続性（もしくは断絶）が説明されていない。とりわけその組織的特徴の変遷に関しては、未だに着目されていないのが現状である。

(2) 我が国における公益研究は、前史としての明治期近代フィラソロピーや民間公益事業を全体的に把握することなく、いきなり戦後バブル期以降の企業フィランソロピーやメセナの記述だけが行われ、その歴史的文脈は示されないまま、欧米からの社会貢献やフィランソロピーをそのままはめ込もうとするものである。これは、まちづくりなどの地域研究（主にボランティアを念頭においたNPO 研究）においても共通した傾向であり、近代と現代、戦前と戦後を貫くような民間公益の構造変化は、未だ不十分な研究領域である。

２．研究の目的

(1)日本の公益活動や社会貢献に思想的経営的な影響を与えた報徳結社という公益団体とそこに関わった実践家や篤志家たちの経営理念・組織形態を抽出し、その変遷をつぶさに追うことによって、結社群拡大の要因とその波及効果を考察する。

(2)報徳結社の発展を分析することによって、近代公益組織の構造的変遷を把握する橋頭堡とする。近代以降の民間公益事業の事例を拾い集め、一つの歴史として織り上げていく通史的研究の第一歩とする。

３．研究の方法

（1）報徳運動を、明治期における主要な公益組織と見なしたうえで、他の公益法人との横のつながりや、経営や理念の比較検討をして、公益活動史の大きな潮流を掴むようにする。

(2)報徳組織の組織運営とその広がりを中心軸として分析したうえで、その経営理念や組織形態の普及と変遷の分析を行う。

(3)報徳の社会的影響力についての分析を行う。報徳思想が影響を与えた篤志家や実業家の把握、また報徳思想を色濃く残している企業や非営利組織について把握する。報徳結社は信用組合・信用金庫・農業協同組合・漁業協同組合へと形を変え、思想的経営的な影響を残しながら発展存続したので、法人転換も含めて考察する。

(4)報徳の思想を見るのみならず、その組織形態や経営の実際と変遷に着目しなければならないため、報徳社の明治以降の資料を全国の図書館や資料館、および現存する報徳社を訪ねて収集し分析する。

４．研究成果

（1）これまで報徳結社の活動史および経営理念の比較検討をしなかったため、日本における公益活動史の大きな潮流を掴むことができなかったが、本研究では、報徳組織の組織運営とその広がりを中心軸として考察し、結社が拡大していった経緯と原因を類推したことによって、近代の公益活動の全体像を知る手がかりを得た。一つの個体群と見なせる凝集性のある報徳結社群を観察すれば、それらが本社支社制度という縦の強い結びつきで構成されており、それが拡大しながらも、まとまりを保持し続けた一つの要因であったことが分かる。一方で、本社にあたる上部組織間による結びつきは、横のネットワーク化であり、そのネットワークは明治期より既に実施されていた。このことから報徳結社は、決して上下関係だけの結社群ではなく、縦と横のネットワーク組織であった。

(2)二宮尊徳の一番弟子であった富田高慶の結社（興復社）が、全国の報徳人から畏敬の念を持って遇せられつつも、報徳群拡大の中心にならなかったのは、富田にそのつもりがなかったからである。言い換えれば、報徳結社の仕法の違いによるものであった。すなわち、行政が報徳仕法を取り入れることによって初めて本来の報徳仕法が成り立つとする福島県在住の富田の行政型仕法に対して、静岡県の岡田良一郎らを中心とする静岡の一群は、自主的な組織として、いわゆる市民結社として早くから拡大路線を実施していたからである。これらは、市民活動と行政との関係を考える上で、重要な歴史的示唆を含んでいる。

(3)報徳組織は本社支社による結社ネットワークを形作っている。本社は支社に対する強制力をある程度有し、同時に支社からみた本社は模倣すべき模範的組織とされる。報徳運動の中心の一つは、福住正兄であるが、彼は明治７年に『富国捷径』を記して、結社型の設立運営方法を示した。これが報徳結社のマニュアルとなり、全国の報徳社がこの方式を真似た。つまり報徳結社群にとって、模倣的制度化の原点というべき書籍がこれである。そこでは本社制度の導入を促し、本社を中心としたネットワーク化に言及している。

(4)報徳結社群のネットワークは、単に模倣

的なだけでなく、強制や規範をも持ち得た強力な制度的同型化の様相をも呈していた。制度的同型化を推し進めて報徳結社群を増やした要因には、政府による力も見逃せない。日露戦争を契機として疲弊した地方を復興するために、明治政府は地方改良運動を行った。そこで近代国家の官僚たちの目にとまったのが報徳結社群である。政党色が薄く、地域に根付いた報徳結社は、明治官僚にとって好都合であり、報徳側にしても疲弊した地方を助けることは本来の趣旨であったと考えられる。しかし、この経緯はさらに詳しく調べる必要がある。

(5) 民間の自主的結社として、ある種の非営利組織群が拡大発展する経緯というのは、『報徳記』『二宮翁夜話』が明治の非営利市場にもたらしたように、思想的実用的に強く人を惹きつける、目の覚めるような一撃が起きたことによって始まったと考えることができる。組織群拡大の意図は、明治の報徳の指導者たる福住や岡田や富田にもあった。しかし、そこには青写真としての明確な拡大戦略は示されておらず、拡大の意図を持ちながらも、創発的に拡大戦略が形成され実行されていったと解するのが自然である。こうした報徳結社拡大の経過を、個体群生態学的に捉えるのか、また拡大戦略として捉えるべきなのかは、今後の課題であり、丹念に発展の過程を追うことによって明らかにしていきたい。

(6)報徳運動草創期のリーダーたちはいずれも拡大に向けての明確な戦略ビジョンを持ってはいなかった。福住正兄の『富国捷径』などは結社群の拡大を視野に入れているという解釈はできるが、それでも拡大戦略の青写真が描かれているとは言えない。彼らの行動は、意図せざる拡大戦略と言うべきものである。草創期の報徳運動は、幕末から明治初期という激しい環境変化の中にあり、あまりにも世界の動きは複雑である。そのため拡大のための明確なビジョンやプランを描くことは難しかったはずである。具体的には、各地で次々誕生する報徳結社があり、一方でその本社機能をもった組織も次々現れた。また、主にエリート層の者が集まった中央報徳会が結成され、書籍の出版、各地で講演会がなされた。地方や中央でそれぞれ独自に報徳運動は展開されて、次第に結社群は拡大されていったのである。報徳結社群の拡大戦略は、報徳ネットワークが環境に適応しようとする学習過程の中で、徐々にその姿を現したのであり、学習プロセスの中で拡大戦略を獲得していったと見るべきだろう。

(7)報徳結社は理念経営であるから、当然ビジョナリーカンパニーでもある。ビジョン経営にとって、アントレプレナーの役割は重大である。偉大なリーダーのビジョンが戦略として浸潤していくからである。しかし報徳運動の場合、明治期以降のリーダーが一人でないことを思えば、一人の頭の中に描かれた拡大戦略が、そのまま報徳ネットワークに適応されたとは考えにくい。つまり報徳運動全体の拡大戦略は、複数のリーダーたちの相互関係によって徐々に形成された創発型の戦略であり、学習プロセスの結果なのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）


①川野祐二「基調講演 江戸期の商人道と明治の実業倫理（久留米大学産業経済研究所 公開研究会 市民事業と商人道--現代のまちづくり・市民事業に通じる心意気)」『産業経済研究』49(1)（通号 214)、pp132～140、2008 年 6 月（久留米大学産業経済研究会)。

②松尾匡・川野,祐二・上田,恵美子［他］「パネルディスカッション（久留米大学産業経済研究所 公開研究会 市民事業と商人道--現代のまちづくり・市民事業に通じる心意気)」『産業経済研究』49(1)(通号 214)、pp149～160、2008 年 6 月(久留米大学産業経済研究会)。

③川野祐二「結社型による近代報徳運動の発展と組織運営に関する研究序論」『非営利法人研究学会誌（9 巻)』pp. 115-130, 2007 年（査読付)。


〔学会発表〕（計５件）


①川野祐二「近代市民結社群にみる組織間関係と中間組織の機能」非営利法人研究学会、2009 年 9 月 27 日、名古屋大学。

②川野祐二「報徳仕法の普及過程と結社拡大の戦略」実践経営学会、2009 年 9 月 13 日、石巻専修大学。

③川野祐二「報徳結社にみる組織拡大と普及活動の経営」実践経営学会、2008 年 9 月 14 日、長崎県立大学。

④川野祐二「近代市民活動におけるネットワーク型組織形態の動態分析：報徳結社の同型化および多様化の解明」非営利法人研究学会、2008 年 9 月 6 日、日本大学。

⑤川野祐二「篤志家たちと日本の社会貢献

－尊徳・渋沢からみる商売と公益」南山大学社会倫理研究所 2007 年度第 1 回懇話会、2007 年 4 月 28 日、南山大学。

〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川野　祐二（KAWANO　YUJI）
下関市立大学・経営学部・准教授

研究者番号：30411747

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：